

門 3
號 3369
巻 3



大堰川の源をたどるの国境也
○金谷
いふれいふれなむいふれなむ
こゝに村をたてたのれりて
○引馬野
もろの衣ははらばらに
むく海野をたどるは思ふも
娘少松ひまの松をたどるは
岩の陰にすまふは思ふも
里乃金の嶽をたどるは
○御坊原
いふれいふれなむいふれなむ
峯からなりて見入る甲斐の
白根あり



昭和二十七年
三月十八日
野末

○吉見山

け林森里に山南に流るる川

○菊川

やまの麓の草屋はまどとて補給の場

いれりての根根は乃人

○切能れ

○駒場原

○栗滝

○治子坂

むらじり梅のふたりの家

はありておる道ひは山

さうららるるは腹より

おぼしき後おれりて

さうららるるは腹より

○糠坂

右のかつておれりて

さうららるるは腹より

○伏見山

ゆるゆるの山の中

旅衣のふたつとて

名のおもては

古代めりて

○長松

人の後りおれりて

いれりておれりて

さうららるるは腹より

おぼしき後おれりて

○祝言

是に

加年

○柳

い山より

清水とて

湖



○西坂
 此村藤子等の屋敷と云ふ事
 後乃ち藤子に藤子と云ふ事
 世に古き事藤子と云ふ事
 八橋
 此村の毎年の大なるあり
 むうの煙が南より北に吹
 流るれば此の藤子の池に
 流る事
 ○長橋
 ○新井
 ○掛川
 此村より藤子の池に
 流る事
 ○小井田
 ○新井村
 ○藤井田
 ○東川



○藤井
 右の山は藤井と云ふ事
 海に流る事
 ○新井
 此村の藤子と云ふ事
 此村の藤子と云ふ事
 此村の藤子と云ふ事
 此村の藤子と云ふ事
 此村の藤子と云ふ事
 ○代官
 此村の藤子と云ふ事
 此村の藤子と云ふ事
 此村の藤子と云ふ事
 此村の藤子と云ふ事
 此村の藤子と云ふ事
 ○本系



○三上之坂
○三乃里

い野の源流をたどるまじり
終りて人後代りてゆたくと
黄金の粒と付くまじり今
に伝ふる富野にもいふは

○作人坂

まの月日目の山伏道
ゆるやかなる坂のまじり
えせまはしてふかぬあつて
作集の人よまじりていふは
まじりていふはまじり
まじりていふはまじり
まじりていふはまじり

○見付
○見付の軒
○見付の軒



町のかたまたまのまじり
まじりていふはまじり
町の軒のまじり

○お社大海神
お社大海神 社領半三石
たのまじり今野神とあはれ

○八幡宮
八幡宮 社領半三石
たのまじり今野神とあはれ

○お社大海神
お社大海神 社領半三石
たのまじり今野神とあはれ

○お社大海神
お社大海神 社領半三石
たのまじり今野神とあはれ

○お社大海神
お社大海神 社領半三石
たのまじり今野神とあはれ

○お社大海神
お社大海神 社領半三石
たのまじり今野神とあはれ



ゆげをそそかひのまゝのま
ち敷村とてそて地つてま

○浅田乃宿

あしげのまに極秀あまの宿あり
海金をあまの宿ありは極秀の湯
あまの湯の表形あまの湯の
宿ありはあまの湯の宿あり
乃成もなす極秀

○天竜川

天竜川 小笠原
毎後北早川也水と信濃
國匠海の流をせし
新田たゆめ敷員と足利さ
づし合戦ありて 竜川のあり
時の中
子身かあ
中北所とすそてあまそ

十二段とてあまの湯ありて
北条神楽とてあまの湯ありて
つもの湯とてあまの湯ありて
あまの湯の湯とてあまの湯ありて
の橋三十二間あり

○淡松

淡松 左田佐中も殿城下
所敷ありとてあまの湯ありて
あまの湯の湯とてあまの湯ありて
あまの湯の湯とてあまの湯ありて
あまの湯の湯とてあまの湯ありて

一月三年



○千早山

むら 霧の貝おかし 海を
右のうらに 谷と朋て 下へ下へ
に白洲のまを 木を掃ひて

○淡名橋

同じ 淡名を 佐方 ぬき され 上る 雲の
毛と 上へ 舟の 雲の 淡名 舟の 舟の
橋 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
乃 山に 湖あり

○高野山

高野山に 舟を 舟の 舟の 舟の 舟の
白浪の 舟の 舟の 舟の 舟の

○白若湯

白若湯の 舟の 舟の 舟の 舟の



白若湯の 舟の 舟の 舟の 舟の

○河見沼

河見沼の 舟の 舟の 舟の 舟の

○猿子場

猿子場の 舟の 舟の 舟の 舟の

○塩橋

塩橋の 舟の 舟の 舟の 舟の

○三川

三川の 舟の 舟の 舟の 舟の



楓葉のりかきとてお茶の申
 海にぶらりけりてはるるそそ名茶の
 産子親をて切付て法大の
 山とて徳へお茶するも
 大岩村 ○小岩村
 右の山つゞきの燦燦とて名茶
 のはるる産子ひひうらひひも
 因一この山はたゞ名茶系は
 志るる産子あるある
 ○石時山 ○山時
 けおの産子ひひうらひひの
 茶産子純くを切付て名茶
 とて名茶なる
 ○吉田 小笠原市正敷城下
 右のうらの山時産子名茶
 産子名茶なる



○長松 百三十五間とて名茶のり
 白子にかりて名茶なる
 かつ乃を山時産子と名茶
 ○花園山 ○山時産子
 切を産子とて名茶なる
 ○二村山
 右のうらの山時産子名茶
 産子名茶なる
 三月の山時産子名茶なる
 乃山の山時産子名茶なる
 ○園来寺 寺領七百四十石
 け産子山は昔自産子名茶の位
 今佛法のまのちとて名茶なる
 樹下とて名茶なる



石田の里をすきそて海をゆく
 とある松年物語の海をゆくは
 むらじの松年物語の海をゆくは
 せきよの松年物語の海をゆくは
 つきよの松年物語の海をゆくは
 の松年物語の海をゆくは

○津浦

津浦のむらじの松年物語の海をゆくは
 人海をゆくは松年物語の海をゆくは
 むらじの松年物語の海をゆくは
 つきよの松年物語の海をゆくは
 の松年物語の海をゆくは

○本海道

むらじの松年物語の海をゆくは
 人海をゆくは松年物語の海をゆくは
 むらじの松年物語の海をゆくは
 つきよの松年物語の海をゆくは
 の松年物語の海をゆくは

○赤坂

赤坂の東海屋の松年物語の海をゆくは
 むらじの松年物語の海をゆくは
 つきよの松年物語の海をゆくは
 の松年物語の海をゆくは

○長流

長流の松年物語の海をゆくは
 むらじの松年物語の海をゆくは
 つきよの松年物語の海をゆくは
 の松年物語の海をゆくは

○法花寺

法花寺の松年物語の海をゆくは
 むらじの松年物語の海をゆくは
 つきよの松年物語の海をゆくは
 の松年物語の海をゆくは

一月三年



濃きとれ門前の里に下
 乃名とささりお世帯の
 月後とくとして心くすま
 初ざりれとて養うて
 よ天王のやうまを
 ○藤川

是より畠の端に
 て左のたれ西屋乃
 右れとて茶屋あり
 乃里くに茶細工の
 の上あり
 ○大年川

後水なれもあれ
 四十二間あり
 乃錦とて山
 西のてとて鎮守



初よりのかさ乃溪
 乃水とて
 乃流とて
 ○文地山
 乃井とて
 ○畠
 乃水野

乃のたのかさ乃
 乃商人
 乃のて子
 乃のて
 ○文地山
 乃のて

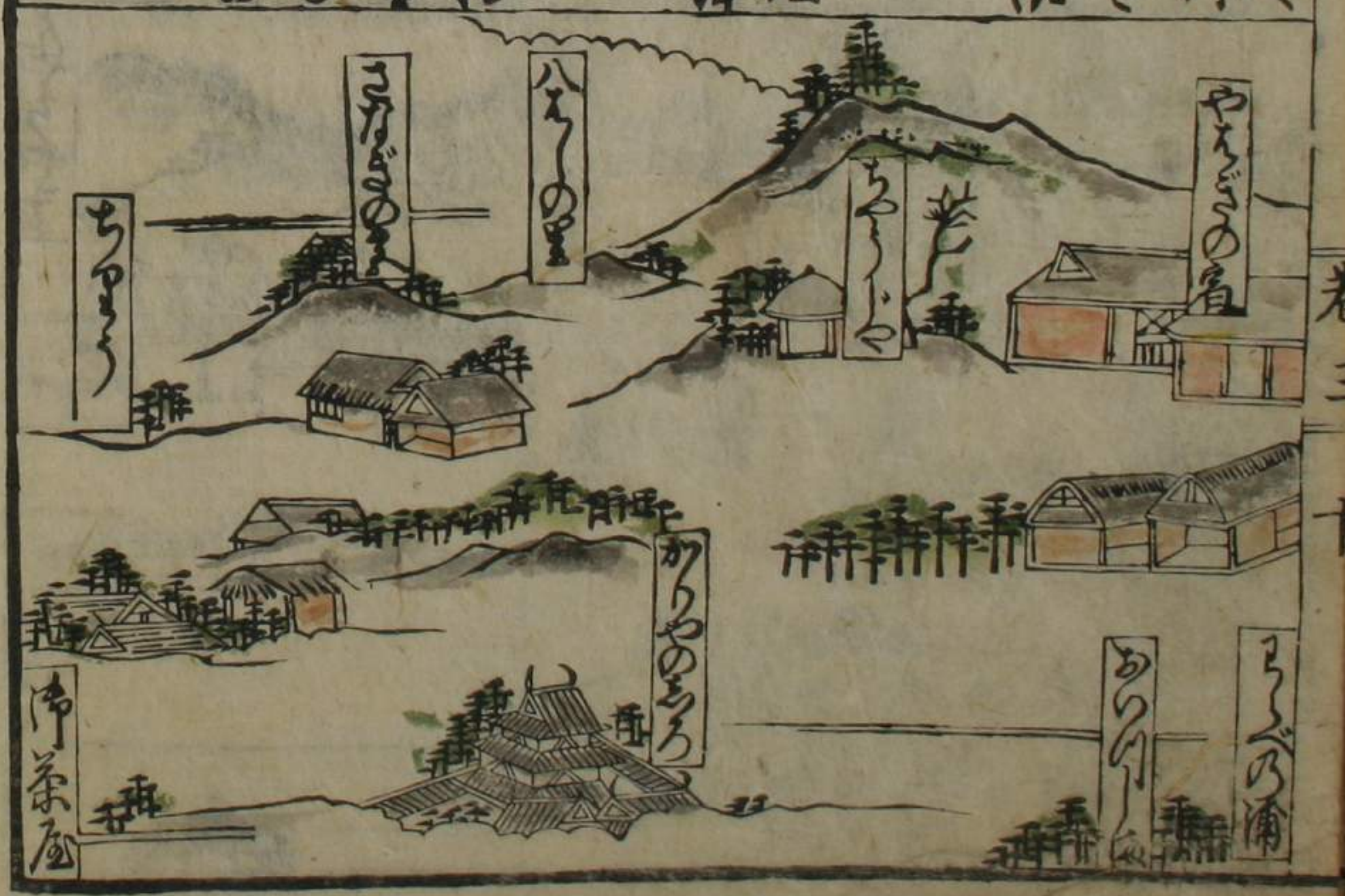
乃のて
 乃のて
 乃のて



ほろりたり時多にて矢とつ
 らせ終ふ也又建武年中に足利
 義満合戦ありしにありしに
 此の申に長者屋ありしに
 ありしに

○八橋の里
 八橋の里は八橋の里にありしに
 ありしに

○池籠鮒
 池籠鮒は池籠鮒にありしに
 ありしに



○八橋の里
 八橋の里は八橋の里にありしに
 ありしに

○草川
 草川は草川にありしに
 ありしに

○今川
 今川は今川にありしに
 ありしに

一目五津



卷三

も海へ流す波にのりて舟は浪に掛り
古里にありてより舟は出ぬらん舟は出ぬらん

○松風の甲

松風の甲は松風の甲は松風の甲は松風の甲は

松風の甲は松風の甲は松風の甲は松風の甲は

○松風の甲

松風の甲は松風の甲は松風の甲は松風の甲は

○松風の甲

松風の甲は松風の甲は松風の甲は松風の甲は

○松風の甲

松風の甲は松風の甲は松風の甲は松風の甲は

○松風の甲

松風の甲は松風の甲は松風の甲は松風の甲は

○松風の甲

松風の甲は松風の甲は松風の甲は松風の甲は

○松風の甲

松風の甲は松風の甲は松風の甲は松風の甲は

○松風の甲

松風の甲は松風の甲は松風の甲は松風の甲は

○松風の甲

松風の甲は松風の甲は松風の甲は松風の甲は

○松風の甲

松風の甲は松風の甲は松風の甲は松風の甲は



○紫名

松平越中守府城下

左の如しれ海を信じて降る石舟
まゝ和をとりつゝ手標本機物ある
は浦の蛤塘しる奥名物也
首目海見東の天宮と信じてよき
降ゆ大徳の王子ひそくよ吉野の
ひわし海軍ありて富みて軍兵
と申し美濃國不破の國に合
戦し伊運の初を降す也
伊成天宮と乃伊時教東の養子
ひひんよ是といふ紫名は浦し海
ありありと意疎やむりしは
伊豫の海おれかこりんはしく
又々海にこりんはこの浦とて
伊くは長崎とての松平佐幕殿
位不たる



○町屋川

右よりきより奥の長瀬
とよぎる大田の如し町大福村
やま村とて

中務の如大橋の百六十間のま
そを也纏出村ありて村あり
村ありて遠きとてありて
乃重なるとて

○目水の里

町つぎの海にあり石の
よき田乃門流す

○野川

紫名よりとてまねし野川の如き有
是より野川とてまねし野川の
くくは農濃の如しは見え
は野川とて



○夏田の里

所作の所を越てむらさき
みとちの村を乃里に和
い八雲のやうきせきより川
川太橋を十九里を見え川を
とらへかきまり

○四月市

ひらきより青森よりありあ
るまけいこの見ありの所ま
き海や右のかつて海船の町
砂浜をまわればきかきま
るをえかきまわれば海田に
堀村をゆきて右のくろ松
をゆきしころより大野をゆき
やうらませきかきまの村を
ゆきしころあり

○遊分

是よりむらさきにゆきかたあり
ありこの海船をゆきしころ
すまきしころあり砂川あり
ふ中岡の橋を掛

○扶実の里

い所よりむらさきにゆきかたあり
けいこのむらさきにゆきかたあり
乃和藤人と杖ありまはるあり
杖のきのむらさきにゆきかたあり
とりむらさきにゆきかたあり

○大岩村

是よりむらさきにゆきかたあり
年通にゆきかたあり右に
と見ゆきかたあり



○鞠原

むらりこね母のうらみ茶を
まきしより室くと誠を申

○茶師

夜のたれまのうらみ茶殿あ
つたれくこの下は茶師堂を
茶師の若目越の大徳泰法師
社園作り乃時いさひ石の中
みてもいさひとさつりき茶なる洞
に光海のかやきとさつりきりて
ん孫あま菊面茶そのめりり
十二の守護神とさつりき家ぞ佛
乃夜所ありと別は石を割と
茶師あま茶とさつりき茶とさつり
さつりき茶とさつりき茶とさつり
かつりき茶と

○鹿野

うらみ茶とさつりき茶とさつり
け夜のうらみ茶とさつりき茶と
うらみ茶とさつりき茶とさつり
うらみ茶とさつりき茶とさつり
かつりき茶とさつりき茶とさつり
うらみ茶とさつりき茶とさつり

○泉の室

大川とさつりき茶とさつりき茶と
左乃りき茶とさつりき茶とさつり
中田村とさつりき茶とさつり

○川合村

川合村とさつりき茶とさつり
川合村とさつりき茶とさつり
川合村とさつりき茶とさつり
川合村とさつりき茶とさつり



○龜山 板倉津波寺殿城下

町のあつた城をたてし野原にあり
たのまの角の入りしをたつたまの
砂川の流るはききしをたつたまの
城の町村をたつたまのたつたまの

○羽黒山

そまより里をたつたまのたつたまの
そまより里をたつたまのたつたまの
そまより里をたつたまのたつたまの

○伴吹山

あまのいりしをたつたまのたつたまの
あまのいりしをたつたまのたつたまの
あまのいりしをたつたまのたつたまの

○藤

いさか縄をたつたまのたつたまの
いさか縄をたつたまのたつたまの
いさか縄をたつたまのたつたまの

○宝持寺

いさか僧の大師の草創也文永年
申に突として文永五年に中興
まら僧の大師の草創也文永年
申に突として文永五年に中興

○岩盤山

いさか僧の大師の草創也文永年
申に突として文永五年に中興
まら僧の大師の草創也文永年
申に突として文永五年に中興



此の甲斐よりありとわたり松林といふ
所は甲斐の松林といふ所は八重といふ
馬場松林村松林村といふ所

○横田川
此よりたのくそよよ松

○信来山

此の松林といふ所は甲斐の松林といふ
所は甲斐の松林といふ所は八重といふ

田川といふ松林といふ所は三木村とい
申村といふ村といふ村松林村といふ

○石船

町といふ所は甲斐の松林といふ所は
乃松といふ松林村といふ所の里川とい
の里といふ所の松林といふ所の里川とい
所の里といふ所の松林といふ所の里川とい



○梅乃木

いづみ山といふ所の松林といふ所の里川とい
乃松といふ松林村といふ所の里川とい

○石船

町といふ所は甲斐の松林といふ所は
乃松といふ松林村といふ所の里川とい

○梅山

極といふ所の松林といふ所の里川とい
三上といふ松林村といふ所の里川とい

○三上山

此の三上山といふ所の松林といふ所の里川とい
三上の明神といふ所の松林といふ所の里川とい
三上の明神といふ所の松林といふ所の里川とい
三上の明神といふ所の松林といふ所の里川とい
三上の明神といふ所の松林といふ所の里川とい



○草津

蘇我氏の所領地なる三井水はつるが
 いづれも天智天皇持統三帝の治
 移幸にや都待た尚ら遠き

○相松山

志保の山は山名は本がれりといふ
 いづれも天智天皇元年四月に
 月神の降るといふ神代卷の事
 不野前に行月天皇の事記の事
 大谷の針倉に給長と云ふ事

○勸修寺

寺領五百石
 醍醐天皇御宇に用山法王の
 いづれも常陸守と云ふ事記の事
 醍醐天皇御宇に用山法王の

○粟極中野

志保の山は山名は本がれりといふ
 いづれも天智天皇元年四月に
 月神の降るといふ神代卷の事
 大谷の針倉に給長と云ふ事



○若の森

社領五百石
 淳和天皇御宇に用山法王の
 いづれも常陸守と云ふ事記の事
 醍醐天皇御宇に用山法王の

○本松山

志保の山は山名は本がれりといふ
 いづれも天智天皇元年四月に
 月神の降るといふ神代卷の事
 大谷の針倉に給長と云ふ事

○大和田里

志保の山は山名は本がれりといふ
 いづれも天智天皇元年四月に
 月神の降るといふ神代卷の事
 大谷の針倉に給長と云ふ事

○宮内里

志保の山は山名は本がれりといふ
 いづれも天智天皇元年四月に
 月神の降るといふ神代卷の事
 大谷の針倉に給長と云ふ事



茶湯せり 寺のまじり 春のまじり
しるし 沖の石物

○水を凍え 寺領の石

まじりといふは 春のまじり 春のまじり 春のまじり

唯の親王 寺領の石 寺領の石 寺領の石

みよのまじり 沖の石物 沖の石物 沖の石物

みよのまじり 沖の石物 沖の石物 沖の石物

○流石

世のまじり 橋のまじり 春のまじり 春のまじり

○林心野

まじりといふは 春のまじり 春のまじり 春のまじり

植のまじり 沖の石物 沖の石物 沖の石物

○天野川

まじりといふは 春のまじり 春のまじり 春のまじり

○般

いし 春のまじり 春のまじり 春のまじり
 ○三石の石
 寺領の石 寺領の石 寺領の石
 沖の石物 沖の石物 沖の石物
 ○依古の石
 沖の石物 沖の石物 沖の石物



○平回村

此村は古くは蘇我氏に属し、大槌の
細流名物也。今も村並木の梅樹を
毎春あるは常々、勝尾の笹山
津田の兵眼のそと松えの瀑の里
嫁のふ葉に布はもてられど

○長柄川

此川は古くは長柄とて、今も
比栲波の天自弘仁三年六月、遠
川の南に比の里にあり、
是ハ近衛院仁平三年四月、源二位
政村が、長柄川を流し、
源八の母は、細流細と折名入と

○天は冬

此村より、東に是ハ孝徳天皇の大
化元年、おじあに、ぬき、



